

Title	経済的グローバリゼーションの進展と国家の変容： なぜ国家は新自由主義政策へと駆り立てられるのか
Sub Title	Economic globalization and state transformation : why the state is driven to neoliberal policies?
Author	鈴木, 弥香子(Suzuki, Mikako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.79 (2015.) ,p.69- 82
JaLC DOI	
Abstract	This paper aims to reveal how the global power structure influences a state's policy-making and which factors have driven states into neoliberal policies. Additionally, it examines the relationship between global capital and states, along with problems arising as side effects under global structure. Globalization has been accompanied by a neoliberal reconstruction of socioeconomic relationships. The rise, spread, and embeddedness of neoliberalism has, in turn, boosted globalization that has brought about tremendous transformation in all social relationships and produced a new global power structure. Under this structure, a state's modality and capacity are forced to transform. With economic globalization's progress, especially after the Bretton Woods System's breakdown, the global power structure influences every state's policy-making, and states cannot escape it. To attract capital and avoid capital flight, states have been driven into a competition of implementing neoliberal policies related to de-regulation, liberalization, corporate tax reduction, and other economic strategies. Methodological nationalism cannot capture the global structure. Certainly, viewing states' policy-making as isolated from the global context is difficult. To tackle this problem, theorists must acknowledge the importance of a supranational epistemological framework, "methodological cosmopolitanism." Capital's source of power is global mobility, which constructs the global power structure. Capital can move freely to more desirable locations worldwide, and this mobility creates competition among states. Such mobility also generates a new stratification issue. According to Zygmunt Bauman (1998), there is a gap between people at the top, "tourist" who have global mobility, and people at the bottom, who do not. In a globalized era, people with global mobility can freely choose where to stay and even escape obligations through means such as tax evasion. With mobility, they gain power without obligation. However, people at the bottom struggle under the burden that remains after people at the top leave. Methodological nationalism cannot address this problem that needs to be acknowledged and confronted through methodological cosmopolitanism. For a single country to tackle this structural issue is difficult; it needs to be tackled through supranational and cosmopolitan cooperation. Although this agenda is ambitious and hard to address, it is essential in avoiding continual reproduction of poverty under the global structure.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000079-0069
-----	---

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

経済的グローバリゼーションの進展と国家の変容

—なぜ国家は新自由主義政策へと駆り立てられるのか—

Economic Globalization and State Transformation

Why the State Is Driven to Neoliberal Policies?

鈴木 弥香子*

Mikako Suzuki

This paper aims to reveal how the global power structure influences a state's policy-making and which factors have driven states into neoliberal policies. Additionally, it examines the relationship between global capital and states, along with problems arising as side effects under global structure.

Globalization has been accompanied by a neoliberal reconstruction of socioeconomic relationships. The rise, spread, and embeddedness of neoliberalism has, in turn, boosted globalization that has brought about tremendous transformation in all social relationships and produced a new global power structure. Under this structure, a state's modality and capacity are forced to transform. With economic globalization's progress, especially after the Bretton Woods System's breakdown, the global power structure influences every state's policy-making, and states cannot escape it. To attract capital and avoid capital flight, states have been driven into a competition of implementing neoliberal policies related to de-regulation, liberalization, corporate tax reduction, and other economic strategies. Methodological nationalism cannot capture the global structure. Certainly, viewing states' policy-making as isolated from the global context is difficult. To tackle this problem, theorists must acknowledge the importance of a supranational epistemological framework, "methodological cosmopolitanism."

Capital's source of power is global mobility, which constructs the global power structure. Capital can move freely to more desirable locations worldwide, and this mobility creates competition among states. Such mobility also generates a new stratification issue. According to Zygmunt Bauman (1998), there is a gap between people at the top, "tourist" who have global mobility, and people at the bottom, who do not. In a globalized era, people with global mobility can freely choose where to stay and even escape obligations through means such as tax evasion. With mobility, they gain power without obligation. However, people at the bottom struggle under the burden that remains after people at the top leave. Methodological nationalism cannot address this problem that needs to be acknowledged and confronted through

* 慶應義塾大学大学院／日本学術振興会特別研究員（DC1）

methodological cosmopolitanism. For a single country to tackle this structural issue is difficult; it needs to be tackled through supranational and cosmopolitan cooperation. Although this agenda is ambitious and hard to address, it is essential in avoiding continual reproduction of poverty under the global structure.

Keyword: Globalization, Economic globalization, State, Neoliberal policy, Methodological cosmopolitanism

キーワード: グローバリゼーション, 経済的グローバリゼーション, 国家, 新自由主義政策, 方法論的コスモポリタニズム

1. はじめに

グローバリゼーションの進展とともに, 新自由主義は台頭, 浸透, 定着を遂げてきた。中谷義和が概観するように, 現代のグローバリゼーションは, 新自由主義的な世界再編と呼応しながら発展してきた。新自由主義は1970年代にその理念が台頭し始め, 1980年代にはアメリカではレーガノミクス, イギリスではサッチャリズムとして政策化され, 新自由主義的再編が「ワシントン・コンセンサス」として国際的協調体制となる中で, グローバリゼーションはより勢いをつけた。そして, 1990年代にはクリントン政権やブレア政権の「第三の道」が「地ならし」として機能を果たしたことで, 新自由主義的政策は定着を遂げてきたのである(中谷2009)。

本稿では, 経済がグローバルに統合され世界的な相互依存が深化する中で, いかに国家が新自由主義的な政策実施へと駆り立てられているのかについて検討を行う¹⁾。その駆動要因となっているものとして本稿で指摘するのは, 新たに構築されているグローバルな権力構造であり, その構造において国家と資本の関係, そして国家の役割はいかに変容してきたのかについて明らかにする。

まず2では, 国家とグローバリゼーションの関係を論じる際に念頭に置く必要がある視座として「方法論的コスモポリタニズム」について検討を行う。その上で3では, 国家の政策決定をとりまく環境がいかにグローバルな要因に規定されており, 抗いがたい構造となっているのか明らかにする。新自由主義政策の施行や廃止は, 国家が国内状況のみを鑑みて自在に決定できず, グローバルな権力構造の中で, 国家は新自由主義的な政策運営をせざるをえない状況に追い込まれていることを示す。続く4では, この新たなグローバルな権力構造は, 可動性の有無による分断, 新たな階層化という副次的な問題を生み出していることを指摘する。最後に5では, こうした問題は, 構造自体への対処, 変革が先送りされ, その維持が暗黙のうちに是認される限り, 再生産され続ける恐れがあることから, 国家を超えたレベルでの対処を思索してゆくことが必要であることを示す。

2. 「方法論的コスモポリタニズム」の重要性

新自由主義政策を考える上で, 経済的なグローバリゼーションと国家の関係を考慮に入れる必要があることは自明であるように見えるかもしれないが, ここで改めてその必要性を「方法論的ナショナリズム」批判, および「方法論的コスモポリタニズム」の議論を通して検討する。グローバリゼーションは国境を越えて相互依存を深化させてきた中で, あらゆるものの在り方に変容をもたらしてきた。このプロセスからは, 無論国家も逃れられず, その役割は変容を余儀なくされてきた。こうした中で, 国家を閉鎖的, 自律的, 自己完結的なものとして静的に分析することはますます困難になっていると言える。

グローバリゼーションと国家の関係は, これまでも社会科学の領野で盛んに議論されてきた。例え

ば、ヘルドラが整理したかつてのグローバリゼーションを巡る論争に代表されるように、グローバリゼーションは抗うことのできない過程であり、それによって国家は虚構と化すとする「ハイパーグローバル論者」、現在のグローバル化は「幻想」であり、せいぜい「国際化」だとする「懐疑論者」、そしてその間をとるような「変容論者」といった三類型が見い出されていた²⁾ (Dicken 1998=2001; Held et al. 1999=2006; Held ed. 2000=2002)。論争が盛んであった当時から十数年が経過したが、依然として国家は消滅していないし、一方で国家の在り方は何も変わらないわけでもない。国家は消滅する、しないというゼロサムの見方ではなく、グローバリゼーションが持つあらゆる社会関係の在り方を変容させるような機能に目を向ける必要がある。

こうした発想は、ウルリッヒ・ベックによる方法論的ナショナリズム批判についての議論に接続して論じることができる。方法論的ナショナリズムとは、社会を国民国家における社会と同一視し、国民国家とその政府を分析対象に据えるものであるが、グローバル化、ベックの概念で言えばコスモポリタン化によって、市場、国家、文化、民族間の明確な境界線が浸食され、異質な「他者」との意図せざる衝突が日常化している現在、「方法論的ナショナリズム」は認識枠組みとして限界に直面しているのである³⁾ (Beck 2004=2006)。

グローバリゼーションが今日の社会に与えている影響の大きさ、それ自体を否定する人はほほいらない一方で、分析対象がグローバリゼーションそのものではなく、個々の事象となると、その事象にグローバリゼーションがいかなる影響を与えているのかについては後景に退くこともある。例えば、武川正吾が指摘するように、これまで社会政策の在り方がグローバル化との関連で論じられることは少なかった⁴⁾。社会政策は国内政策であり、各国政府の国内管轄事項であると伝統的に考えられてきたのである。しかしながら、経済のグローバルな統合が進んだ今、社会政策を純粋な国内政策として考えることは困難になっているのである (武川 2007: 75)。政策について検討する際の方法論的ナショナリズムの限界を認め、グローバリゼーションが政策決定にどのような影響を与えているのかについて目を向ける必要がある。中谷が言及するように、内封的な国家論に依拠することは、グローバル化と経済、社会がトランスナショナルに再編されていく過程の中で国家の機能がどう変容しているのかという現状を看過することになりかねない。グローバル化が経済社会関係の脱国家的・国境横断的深化過程であるとするならば、国民国家を閉鎖的な単位として静態的に分析する方法論的ナショナリズムでは不十分である (中谷 2009: 20-22)。

ベックはこの方法論的ナショナリズムを乗り越える上で、グローバルな布置状況を考慮に入れる「方法論的コスモポリタニズム」への転換が必要であるとしている⁵⁾ (Beck 2004=2006)。コスモポリタン化が進展した現在、あらゆる問題はグローバルな文脈を持つのであり、そうした文脈を等閑視すれば現実を見誤ると考えられている⁶⁾。ベックが指摘するグローバルな文脈を持ち一つの国家では対処できない問題としてよく知られているのは、気候変動、金融危機、テロなどのリスクであるが、本稿が扱うグローバルな資本と国家政治の問題も「方法論的コスモポリタニズム」によって対処すべき具体的な問題であるとされている。グローバル資本は、国家を自らに都合の良いかたちへ自己変革させる強大な力を持っているのであり、こうした資本と国家間のコンフリクトは、ナショナルな枠組みからは適切に捕捉、解決することはできないのである (Beck 2004=2006: 83)。方法論的ナショナリズムでは国家の政策決定をとりまくグローバルな環境を把握することはできないのであり、「方法論的コスモポリタニズム」という視座から、国家の役割、機能とグローバル化の連関を考慮する必要があるのである。

3. 国家をめぐる新たなグローバルな権力構造

3-1. 「ブレトンウッズの妥協」から「黄金の拘束服」へ

国家の新自由主義政策実施に関わるグローバルな連関とは、どのように捉えることができるだろうか。そもそも、なぜ国家政策が純粋にナショナルなものではなくなり、グローバルな構造に影響を受けるようになっていえるのであろうか。ここからは本題に入り、こうした問題について、国家に対して新自由主義的な政策運営を強いる構造の検討を通じて明らかにしてゆく。

国家の政策決定をめぐる環境を考える上でひとつの歴史的な分岐点になるのは、ブレトンウッズ体制であり、ブレトンウッズ体制崩壊後、国家はグローバル経済の波に飲み込まれていくことになったと考えられる。ダニ・ロドリックはこのブレトンウッズ体制においては、貿易自由化を促進させる一方、各国政府が国内の政策課題を実施するための余地を与えるという「妥協」があったため、「節度のある」グローバリゼーションが実現されていたと評価している⁷⁾ (Rodrik 2011)。第二次世界大戦末期の1944年7月に締結されたブレトンウッズ協定では、国境を越えた資本の移動は制限されていたため、各国家は政策を自国の裁量によって決定することができていた。ブレトンウッズ体制の本質は、貿易に関する国境での制限をいくつか廃止し、貿易相手国を差別しなれば、あとのことは各国の裁量に一任されていたことにある。国際金融の分野では資本移動に対する規制を維持することができ、貿易の分野では数量規制は難色を示されていたものの、輸入関税は認められており、国内経済の安定のための諸策を講じる余裕が確保されていたのである (Rodrik 2000=2002: 402-403, 2011)。これに類似した議論として、ジョン・ラギーの「埋め込まれたリベラリズム (embedded liberalism)」を挙げることができる。ラギーも、ブレトンウッズ体制下においては国際経済秩序の安定と国内における経済成長と雇用の確保が両立されていたことを指摘し、一定の評価を与えている (Ruggie 1982)。

このようにラギーやロドリックが評価するブレトンウッズ体制下での経済的、政治的安定は、1970年代半ば以降の金融市場の自由化及び新自由主義的改革の伝播によって、大きく変化を遂げることになる。その変化を端的に言い表せば、経済的グローバリゼーションの進展によって経済のグローバルな統合が急速に進み、国家は自律的に政策の優先順位を決めることが困難となっていったのである。このグローバルに統合された経済と国家との関係を、ロドリックは「黄金の拘束服」と呼んでいる。「黄金の拘束服」とは、もとはトーマス・フリードマンの概念であり、彼の定義によれば、個々の国家がグローバルな市場に対して魅力的であろうとして、絶えず経済制度を合理化しなければならないという圧力を加えるものとされている⁸⁾ (Friedman 1999=2000: 142)。「黄金の拘束服」は「正しく」身につけることができれば、例えば途上国はたちどころに先進諸国に追いつくことも可能となるが、仮にこれを捨てれば競争において落ちこぼれてしまうのであり、この他の選択肢はないと考えられている。

ロドリックは、フリードマンは「黄金の拘束服」をすでに確立された現実として過剰評価していると指摘しながらも、グローバルに統合された経済と国家政治の間には根本的な緊張関係が存在し、経済のグローバル化は政治の縮小を要求し、テクノクラートに大衆からの政治的要求に対応しないように指示しているとして、フリードマンのアイデアの中心的洞察は有効であるとしている (Rodrik 2011=2014: 223)。ロドリックが認めるように、国家とグローバル経済の間には一種の緊張関係があり、グローバルな資本の活動を阻害しないような政策実施への圧力が構造的に構築されていると言える。このような国家像はヨアヒム・ヒルシュの「国民的競争国家」としても理解でき、資本の「立地」として魅力的にな

るべく、自由民主主義システムを蔑ろにしながらあらゆる資源を動員し、新自由主義的規制緩和や自由化を行うような国家間の競争が生じているのである（Hirsch 1995=1998）。つまり、あらゆる国家はグローバル資本の動向に注視しながら国家間の競争を行うことを構造的に強いられているのである⁹⁾。

3-2. 新たなグローバルな権力構造下の国家像

グローバル化の中での国家の変容を捉える上で、留意すべきことが二点ある。第一に、グローバルな構造の中で「小さな政府」へ移行していく傾向があったとしても、「強い国家」としての機能は強化されているということである¹⁰⁾。サスキア・サッセンが指摘するように、経済的グローバリゼーションは国民国家の多くの機能を弱体化させた場合であっても、ある種の機能、特に財務省のような国際銀行機能と結び付いた要素を強化しているという側面を認識する必要がある（Sassen 1996=1999: 33）。また、若森も指摘するように、グローバル経済体制の中で自国の競争力強化を考慮する場合は、国内的には競争的な経済秩序を構築するために新自由主義的な法的介入を行うことも厭わないのであり、ある部分では強い権力を行使するようになっているのである（若森2013: 86）。

国家とグローバル市場経済の間の緊張関係を認めることは、必ずしも「国民国家の終焉」を意味しない。方法論的コスモポリタニズムの重要性を主張するベックも、ハイパーグローバリゼーション論者の主張するような、「グローバリズムによって国民国家が終焉する」という議論を否定しており、ナショナルなレベルでの活動は依然として重要であるとしている（Beck 2004=2006）。ロバート・ホルトンはこのような点をベックの「方法論的コスモポリタニズム」の一つの特色としている。ベックの議論のポイントは、国民国家もナショナリズムも消滅するのではないが、それらのナショナルな要素は、もはや統治のための核となる制度を独占するものではなく、たくさんのアクターの中の一つになったということにあるのである（Holton 2009: 106）。ベック自身が「コスモポリタニズムの議論において国民国家への言及は引き続き行われるが、国民国家はラディカルに異なった地平に置かれ、分析されることになる」（Beck 2004=2006: 33）と指摘するように、「方法論的コスモポリタニズム」では国民国家の視点が無視されるわけではない。国民国家を国民国家の視点から見ただけでなく、コスモポリタンな文脈に国民国家を置いて、それがいかに変容しているのか捉え直すことが重要なのである。

そして、第二に言及すべきなのは、国家間の競争の中で、一つの普遍的な新自由主義的な体制へ収斂していくわけではないということである。アイファ・オングも指摘するように、ひとつの特定の実態としての新自由主義があるのではなく、各国家、地域に特有の形で新自由主義的な統治が展開されていると言える（Ong 2006=2013）。たしかに、それぞれの国家、地域が持つ文脈を無視してこの問題を考えることはできない。しかしながら、なぜ各国家がそれぞれの形態で新自由主義的な介入を実施するのかと言えば、国家とグローバルな資本との間に緊張関係が存在するためであり、その関係、構造から逃れられる国家は存在しない。国家の政策決定を考察する上で国家と資本の関係性を等閑に付すことは不可能であり、グローバルな資本に最適な環境を提供するために国家間で競争が行われているという構造を問題化する必要がある。国家ごとに異なる「黄金の拘束服」のカスタマイズの方法があったとしても、それを押しつける構造そのものは国家を超えて共有されているのである。

結局のところ現在の構造において、国家が「成功」するためにはこの「競争」に勝たねばならない¹¹⁾。新自由主義的諸策を実施する国家のみを批判の対象とするだけでなく、国家にそのインセンティブを与えている構造、それ自体を問題化する必要がある。日本では新自由主義に対するオルタナティブ

として理想化されることが多いスウェーデンやノルウェーといった北欧の福祉国家ですら、失業や企業の倒産が当然のこととして生じる競争社会の顔を持っているのであり、そのような側面があるからこそ「成功」したと見做されていることを看過してはならない。橋本努が指摘するように、2000年代以降、大きな政府であっても経済成長率の高い国が多くなってきたのは、従来型の福祉国家が成功したのではなく、大きな政府と新自由主義を両立させた「北欧型新自由主義」が成功しているということなのである¹²⁾ (橋本2012: 129)。

このように、新自由主義的な政策運営を進めながらも福祉や社会保障を充実させることに成功しているスウェーデンのような国を成功例として称賛するということもできるが、まずすべての国に対してこのモデルが適合し、同じように成功することができるとは限らない。その上、その称賛は結局のところ「黄金の拘束服」の更なる普及を暗黙の内に是認することになり、グローバル資本が国家の政治に対して優位な立場にある現状を変革することには繋がらない。グローバル資本主義の現状の中でナショナルな経済的利益を最大化しようとすれば、「北欧型新自由主義」を理想とする発想につながるのは自然な流れであるかもしれないが、それは現状を暗に肯定し、更に強化することを招く危険性を孕んでいるのである。

3-3. 国家間競争とトランスナショナル・プライベート・パワーの台頭

こうしたグローバルな権力構造下の国家間競争は具体的にはどう考えられるのであろうか。本稿でその一例として取り上げるのは、租税競争、「底辺への競争」である。租税競争とは、大島孝介によれば、企業や資本といった移動可能な課税ベースを、税制を使って自地域に呼び込もうとする、または税収を確保しようとする国や地方などの政府間の競争のことである (大島2011: 1)。グローバリゼーションによって資本が国境を越えて移動することが容易となった今日では、国家は資本を自国から他国に流出させないようにするため、逆に他国からは自国へ資本を呼び込もうとするため、法人所得や資本所得への課税を低下させる可能性がある¹³⁾。

グローバル資本への優遇措置を国家が競って行い、租税競争が激化した場合に生ずる最悪の事態とされているのが「底辺への競争」である。「底辺への競争」とは、国家が減税、労働基準の緩和などを競って行うことによって、労働環境や社会福祉が最低基準に向かうことであるが、新川敏光 (2003) や松田由加 (2010) などが指摘するように、実際に世界的にこれが生じているとみなすことは難しい¹⁴⁾。松田によれば、OECD平均では、1980年代以降所得税は若干減少しているものの、法人税、社会保障負担、財産税、消費課税などはわずかながら増加傾向にあり、「底辺への競争」というほどの状況が現実のものとはなっていないことが分かる。しかしながら同時に、日本においては税負担が法人所得と資本所得から、消費や労働へと移行されており、「底辺への競争」が他国よりもより現実化しつつあることも松田は指摘している。1990年代以降、相対的にグローバルに移動しやすい所得税と法人税はバブル期を除いて減少しており、相対的に移動しにくい社会保障負担と消費課税は増加傾向にある (松田2010: 113-114)。2014年4月に消費課税が8%となった一方で、2013年度で復興特別法人税が廃止され、2015年度の法人税の実効税率引き下げに向けて検討が加速していることが記憶に新しいように、日本においてはそうした傾向が強化されつつあると言える。

なぜこのように国家に対して経済的主体が優越して、国家を競争へ駆り立てることができるのか。現在のグローバルな構造を形作ってきた資本の持つパワーの源泉をどう考えればよいのか。この背景にあ

るのは、経済的主体が国境を越えたグローバルな可動性を獲得することで、かつてない権力を手にしているという事実である。杉浦章介は、トランスナショナル企業による国境を越えた工程間分業の進展、いわゆる「フラグメンテーション」の展開がここまで盛んになった要因として、モジュール化の進展を挙げている¹⁵⁾。モジュール化によって生産可能な空間的な制約条件が減少したことで、企業活動の立地選択は生産モジュール単位ごとに可能になり、それによって国境を越えた強力な交渉能力と統治能力、つまりトランスナショナル・プライベート・パワーを手にするようになったと説明している（杉浦2014）。生産拠点の選択における空間的、地理的な制約が大幅に減少し、グローバルな規模で最適な立地選択ができるようになったことで、国家としては、いかに企業を呼び込むか、または企業に逃げられないようにいかに引き留めるかということが大きな課題として課されるようになっていく。ベックも指摘するように、投資をやめる、資本を引き揚げるということは、国内政治と社会の生命線である雇用の場と税金を同時に取り上げるということ意味する。これは国家の基盤を揺るがしかねず、国家にとってインパクトの大きいものである。ベックは、資本を引き揚げるという圧力によって国家に優遇措置をとらせることを、資本の持つ「出口権力戦略」と呼んでいる（Beck 2002=2008: 175-177）。グローバルな可動性を持つ経済的主体は、対象とする国や地域が提供する投資条件や税制が都合のよいものでなければ、別の場所に資本を移転することができる。そうしたグローバルな資本の動向に国家は翻弄されざるをえないのであり、そのパワーは決して無視できない非常に強大なものになっていることがここに窺える。

このグローバルな可動性を源泉とした新たなパワーが、グローバルな資本に対して国家が従属する関係を生み出しており、現在のグローバルな権力構造を規定している。武川が指摘するように、超国家化した資本は、国家に資本の海外逃避を意識させながら、税負担の削減や規制の撤廃といった資本の自由な活動のために必要な条件を確保するように圧力を加えている¹⁶⁾（武川2007: 82）。このような行動を可能にしているのは、政治がナショナルなレベルに留まっているのに対して、資本は自らにとって条件のよい最適な場所に移動することができる可動性を有しているためなのである。

4. グローバル化時代の新たな階層化の問題

この可動性による問題は、資本と国家の間だけで生じているのではない。この可動性こそが新たな階層化の問題を引き起こしていると指摘しているのがジグムント・バウマンである。これは3までで明らかにしてきたグローバルな権力構造が副次的に生み出している問題であると言え、この権力構造が孕む問題性を具体的に示すものである。バウマンによれば、グローバルな可動性を持つものと持たざる者の間に分断が生まれており、思いのゆくままグローバルに移動できる可能性を持つものは権力を持ちながらも様々な負担から自由になることができる一方で、持たざるものの負担は増加する一途にある（Bauman 1998=2010）。可動性を持つ「上層」の人々は思いのままにどこに移動するかを決定する「旅行者」となり、「下層」の人々を置き去りにすることができ、「上層」の人々は「下層」の人々がつなぎとめられている地域の汚さや不潔さを捨てて去っていくのである（Bauman 1998=2010: 120-131）。場所に縛り付けられていない権力は、通知や予告なしで移動できるため、搾取するのも自由なら搾取の帰結を放置するのも自由であり、その帰結についての責任は免除されることとなる。この責任の免除は、可動性を手にした資本にとって非常に大きな利得であり、かつてない義務からの権力の切り離しを意味するのである（Bauman 1998=2010: 13-14）。

このような「旅行者」の像は、具体的にはクリスティア・フリーランドがその著書の中で描き出したグローバル化時代のスーパーエリート、「プルトクラート」として理解することができる (Freeland 2012=2013)。世界の富は彼らに集中し、「プルトクラート」とそれ以外の人々に分割されつつあり、1970年代のアメリカでは所得上位1%の年収は国民所得の10%であったが、35年後には国民所得の3分の1を占めており、その格差はかつてないほど拡大しているという (Freeland 2012=2013: 20)。彼らはグローバルに行き来しながら国境を越えたコミュニティを築き上げており、それは一つの民族とも呼べるとフリーランドは指摘している。グローバルな競争環境で勝ち抜ける能力を持たない庶民への再分配に関して積極的ではなく、その一部は、どの国の政府からも法的に干渉されずに自由に営利行為が行える人工島への脱出をも考えているとも言われる (Freeland 2012=2013: 22, 362)。

グローバルな可動性を持つものは権力を手にしながら、同時に様々な義務から逃れることのできる選択肢をも手にする。これは、3で言及した経済的なアクターだけでなく、個人にも同様に当てはまることである。ベックも指摘するように、伝統的な支配は領域に核心があり、空間的・物理的近接性を前提としていたが、いまや支配関係はそういったものを必ずしも前提としない (Beck 2002=2008: 174)。たとえば、グローバルな可動性を持ち膨大な資産を持つ「プルトクラート」のような個人は、本来国に納めるべき税金を払わないで済むように、タックス・ヘイブンを利用して租税回避をすることが可能である。このような個人は租税回避のためオフショア経済圏を一時的に居住地としながらも移動しつづけるため、永続的旅行者 (Permanent Tourists) と呼ばれており、まさにバウマンの言う「旅行者」のイメージにも合致するものであると言える (Chavagneux and Palan 2006=2007: 90)。可動性を持つ主体は移動によって納税から逃れることができるが、その結果減った税収を埋めるのは可動性を持たざるもの、低所得者や中所得者であり、彼らへの負担が増加することは想像に容易い。

しかし、「下層」にいるものは、みながローカルな土地から動かない、動けないのではなく、グローバルな「上層」対ローカルな「下層」という単純な構造があるのではない。「下層」にいるものであるからこそ、移動しなければと生きられない事態も考えうる。バウマンは「旅行者」を描くと同時に、「放浪者」も描き出している (Bauman 1999=2010: 131)。放浪者は「非自発的な旅行者」であり、旅行者は好きな場所に好きなように移動できるのに対して、「放浪者」は彼らの手が届く世界が我慢できないほど不愉快であり、移動するほかに選択肢がないため移動するのである (Bauman 1999=2010: 130-131)。こうした放浪者は旅行者のように自由に移動先を決定することはできないため、移動先の国家において粗悪な環境下の労働や生活を強いられ、搾取されることもあることも考えられる。しかし、それでも彼らは「よりよい生活」を求めて移動する。例えば、この日本においても外国人技能実習生制度のような制度下で、外国人労働者を自らの市場の外部として位置づけ、搾取してきたという事実がある。貧困問題は日本国民の中だけにあるのではなく、こうしたグローバルな文脈の中で生み出された周縁的な存在としての外国人労働者の中にもあるのである。このようにグローバルな可動性は、それを持つもの、持たざるもの、そして持たないけれども移動せざるを得ないものの間に大きな分断を生んでいるのである。

5. 「方法論的コスモポリタニズム」のその先へ

このようにグローバルに移動可能であり、納税といった義務から逃れることができるという特権を持つ人々と持たざる人々の間に分断がある中で、国家が可動性を持つ主体に対してさらなる優遇措置を採

用し続けられ、その不平等は強化され、より大きなものとなることは想像に難くない。こうした問題はグローバリゼーションがもたらした負の側面であり、国家を閉鎖的で自己完結的なものとして捉える方法論的ナショナリズムでは不可視化される可能性があり、ここで認識枠組みとしての「方法論的コスモポリタニズム」の重要性を改めて確認することができる。経済がますますグローバル規模での相互依存を免れなくなっている中で、この構造を問題化せず、国家が「出口権力の戦略」に屈し「黄金の拘束服」を甘んじて装着し続けているのは、国家の政策決定における自律性は低下し、そして租税回避による税収減で政策実行能力が縮小する可能性も考えられるのである。

このようなグローバルな権力構造を認識し、それがローカル、ナショナルなレベルでは有効な対処はできないという理解を得た場合、次の段階の議論として、多くの論者はグローバルなレベルでの対処の考察・検討に向かう傾向にある¹⁷⁾。例えば、バウマンもグローバルな解決を重要視する指摘を行っている。

今日の深刻な諸問題をローカルな方法で解決できるとは考えていません——今日の諸問題の深刻さは、それが本来的にグローバルなところにあります。つまり、問題はグローバルに生み出されており、それゆえにグローバルにのみ解決だ、ということです。(Bauman and Citlali 2010=2012: 112)

このようにグローバルな問題にはグローバルな対処が必要であるとする視座は、しばしば政治的なプロジェクトとしてのコスモポリタニズムの議論に接続されてゆくことになる。本稿の問題意識に引きつけて言えば、経済がグローバルに統合された今、新自由主義的政策への圧力から逃れることのできる国家は存在せず、かつ一国家のみでは対処は不可能であるため、国家レベルの対応だけではなく、超国家的に、コスモポリタンに連帯、協働するという方向性を検討する必要があると考えられる。このように方法論的コスモポリタニズムの立場から問題を捉えた上で、いかにその問題を解決できるのかという次の段階の問いを考える時、いかにしてグローバル経済を統治するか、あるいは、いかにしてグローバルな政治を構想するかといった政治—経済的なプロジェクトとして、コスモポリタニズムについて検討することは重要な課題であると言える。

しかしながら、この課題は必要であると同時に非常に困難であることを認めざるをえない。ロバート・ウェントも指摘するように、まずグローバルな統治の重要性を皆が支持するとは限らない上に、さらにそうした方向性を支持する人の中でも、いかにグローバルな政治を実現するかという具体的案に関しては意見の相違が見られるのである (Went 2004: 349)。例えば、バウマンがグローバルな解決として具体的に希望を寄せるのは、困窮している人々に直接手を差し伸べることができる、脱領域的コスモポリタンな非政府組織やアソシエーションである (Bauman and Citlali 2010=2012: 124)。これは一つの解決策として評価することはできるものの、プライベートな組織ではすべての貧困を普遍的に捕捉し、生活を保障することは困難であり、グローバルな不正義を正す根本的な解決として考えることは難しいと言わざるをえない。それに対して、コスモポリタン民主政を構想するデイヴィッド・ヘルド (Held 2010) のような立場もあるが、そうした統治の在り方はヨーロッパの歴史的な文脈を強く持ったものであり、ヨーロッパ中心主義的な価値の押しつけとも捉えられうるものであり、国家を超えた政治をいかに構想するのかという挑戦は非常に困難であると言える¹⁸⁾。

ヘルドによれば、今日我々が直面しているパラドックスは、我々が取り組むべき共通の問題はますます

すグローバルになっているが、それらに対処するために我々が持っている主な手段はナショナル、ローカルで、弱体で不十分なものであることであるという (Held 2010: 143-146)。このパラドックスは二つのインプリケーションを持っていると考えられる。第一には、グローバルな問題に対してはグローバルな解決が必要であることを認識したとしても、実際に多くの政治的な資源を持つのは国家や自治体である場合、たとえそれが「弱体で不十分」であっても、現実には差し迫った状況に置かれた人々を救済するにはグローバルな解決を待つ余裕は存在せず、国家や自治体に縋るしかないということである。現在深刻な状況にある問題に対して、ナショナルやローカルなレベルでいかに対処するかという術を考えることを軽視することは決してできない。

しかしながら、同時にそうした問題はやはりグローバルな構造の中で生み出されているものであり、グローバルな対処も必要であることを認識する必要がある。これが第二のインプリケーションであり、ヘルド自身が言うように、グローバルな問題は国家を超えた集合的かつ協調的な行動を求めている (Held 2010: 146)。なぜ再びそう主張できるのかと言えば、グローバルな対処を先送りし、取り組みを放棄してしまったとしたら、現存する諸問題の再生産、更なる悪化を許容してしまうことになるためである。可動性を持つ個人や企業はますます富める一方で、その皺寄せは持たざる者へと向かい、その負担はますます増大する可能性があるのである。如何にナショナル、ローカルに対応しようとしても、グローバルな構造そのものを変革しなければ、グローバルな可動性を持つ資本に政治は翻弄され続けてしまうのであり、根本的かつ効果的な解決は決してもたらされない。どの国、地方に製造拠点、本社機能を置き、どのような雇用を生むのかを決めるのは企業であり、どこに対して投資するのか、しないのかを決めるのは投資家であり、こうした経済的主体がグローバルな可動性によって権力を有している今、ナショナルな領域に留まるばかりの政治では、国家は自らの立場を弱め続けるばかりであると考えられるのである。

本稿で見てきた経済的なグローバリゼーションがもたらした国家の機能変容は、ネガティブな側面が強かったが、グローバリゼーションがもたらす変容自体は決してネガティブなものばかりではなく、ポジティブな影響も生み出しているとも言え、悲観するべきことばかりではない。例えば、グローバリゼーションが進展し、リスクが国境を越えて共有される中で、リスクへの国境を越えた取り組みを支えるような国家を超えた連帯やグローバルな公共性が形成されつつあるという可能性も考えられるのである (鈴木2014)。いかに困難であったとしても、こうした萌芽にも目を向けながら、ナショナルにいかに対処するかだけでなく、グローバルな権力構造に、いかに国家を超えて対抗、対処できるかという問いにも取り組む必要があるのである。

6. おわりに

本稿では、いかに国家が新自由主義的政策へと駆り立てられているのかについて、新たなグローバルな権力構造に関する検討を通して明らかにしてきた。グローバリゼーションはこれまであらゆる関係性を根本から変化させてきたのであり、国家もそうした影響を受け、その在り方を変容させてきた。特に、ブレトンウッズ体制崩壊後、経済のグローバルな統合が急速に進む中で、国家は新自由主義的な政策運営を余儀なくされてきた。資本逃避を回避し、より多くの資本を引きつけるための国家間競争へと駆動されていったのである。経済的グローバリゼーションの進展によって、国家は「終焉」を迎えたり、何か一つの普遍的な新自由主義的体制へと収斂していくとは考えにくい、グローバル資本による

経済活動を阻害しないような圧力を加えるグローバルな権力構造から逃れられる国家は存在しないのであり、あらゆる国家がグローバル資本との間に緊張関係を持っているのである。

このグローバルな権力構造をつくりだしているのは資本が持つグローバルな可動性であり、これこそが権力の源泉になっている。そして、この可動性はそれを持つものと持たざるものの間での分断、新たな階層化という副次的な問題をも生み出している。この問題はグローバルな権力構造が維持される限り再生産され続け、その不平等は一層悪化してゆく可能性がある。こうしたグローバルな構造が生み出す問題に対処するには、ナショナルなレベルだけでなく、国家を超えた対処に目を向ける必要がある。

いかに国家を超えてこうした構造を統治できるのかについて考えることは決して容易ではないが、高度にグローバル化された時代に生きる我々の眼前にある差し迫った課題であり、もはや逃れることはできない。国家とグローバル資本の関係について「方法論的コスモポリタニズム」からのラディカルな批判を継続し、ナショナルなレベルだけでなく国家を超えたレベルでの対処を検討するという困難かつ挑戦的な課題について、今後も更に検討を進めていきたい。

注

- 1) 本稿における新自由主義政策（若しくは新自由主義的政策）という言葉を用いる場合には、主に国家は自由な経済活動を阻害するべきではないという考えから進められる民営化、自由化、規制緩和や、自助努力が重視されることによって進められる福祉の切り詰めといった諸政策を念頭に置いている。
- 2) このうち、ハイパーグローバル論者はグローバリゼーションによる諸影響を歓迎すべきものとする「積極的グローバル論者」と、歓迎すべきではないとする「悲観的グローバル論者」に分けて考えられるとされている（Held ed. 2000=2002: 27）。このグローバル論争における三類型は、当時の論争の潮流を把握するモデルとしては有用であるものの、この類型に個々の議論を当てはめることはそれぞれのニュアンスを消し去り、矮小化してしまう可能性も存在することに注意する必要がある。
- 3) このコスモポリタン化と方法論的ナショナリズム批判のつながりについては鈴木（2014）を参照されたい。
- 4) グローバリゼーションと社会政策の関係、中でも社会政策をグローバルなものとして論じるということは少なく、武川正吾の一連の研究（武川2002, 2007; 武川・宮本編2012）がその中心になっているが、その他にも下平・三重野編（2009）、三重野（2001）が挙げられる。
- 5) 「方法論的コスモポリタニズム」のような発想は一見すると新しいもののようにも思われるが、社会学の通底に以前からあった発想であるとも言える。こうした議論に関して詳しくはChernilo（2007）、Kentdall et al.（2009）を参照されたい。
- 6) ジェラード・デランティによれば、コスモポリタニズムはこれまで規範的な政治哲学の領域で影響力を発揮してきたが、近年は社会的、政治的な分析に対して方法論的なインプリケーションをもたらす形においても貢献を遂げてきた。社会科学において、いかにナショナルな枠組みを超えて相互依存的な世界を理解するかという大きな問いが取り組まれる中で、新たな概念枠組として方法論的なコスモポリタニズムの重要性が認識されるようになっているのである。これは社会科学におけるコスモポリタンな転回（cosmopolitan turn）とも言えるとデランティは指摘している（Delanty 2009: 3）。
- 7) ロドリックはグローバリゼーションのさらなる拡大と、民主主義、国家主権の三つのうち二つしか両立しえないというトリレンマが存在すると主張していることでよく知られている。ロドリック自身はハイパーグローバリゼーションを犠牲にし、グローバリゼーションを「薄く」留め、「プレトンウッズの妥協」を再創造するという方向性に希望を見いだしている（Rodrik 2012=2014: 237-8）。
- 8) フリードマンはただの「拘束服」ではなく、「黄金の拘束服」という表現を使っていることから読み取れるように、このグローバル市場経済と国民国家の関係を肯定的に見ている。なぜならば、「黄金の拘束服」は国民国家による政治を縮小させたとしても、経済的には、国家をグローバルな競争という圧力下に置くことで、貿易や海外からの投資を増加させ、民営化と資源の有効利用を促し、その結果、経済を成長させ、平均所得を増やすためである（Friedman 1999=2000: 143）。

- 9) このような動向がもたらす帰結について、ナンシー・フレイザーは次のように指摘している。国家フォーディズム的な福祉国家からポストフォーディズム的な競争国家に変容しつつある中、「底辺への競争」によって無数の規制緩和のプロジェクトがあおられ、社会福祉を市場に移し、家族に投げ出すかして民間に委ね、国家内の「社会的なもの」が解体されるような傾向が強まっていると言えるのである (Fraser 2008=2013: 170)。
- 10) こうした側面は、本稿では主に論じている経済的なグローバリゼーションの進展が国家に与えた影響以外にも当てはまる。例えば9.11以降、グローバルなテロ行為の脅威から国家は治安対策についての機能を強化してきたと言え、グローバル化によって国家の力は弱まるばかりではなく、強まっている側面も存在するのである。
- 11) ピーター・ディッケンが指摘するように、こうした状況下では国家は「四人のジレンマ」に追い込まれていると言える。個々の国家は最大利益を追求するために合理的な選択をしたつもりであっても、そうした選択は全体としてはかえって利益が少なくなってしまうことがある。国家を超えて協調すればより利益を得られるはずであるにもかかわらず、他国の犠牲の上に利益を得るように行動する強いインセンティブが、国家間競争の中で形成されているのである (Dicken 1998=2001: 107)。
- 12) その新自由主義的な側面を具体的に挙げるならば、スウェーデンでは国際競争力の中でも価格競争力に影響を与える労働コストが低く、解雇規制も表面的には厳しいが、実質的には緩やかであるという。企業は原材料を調達するのと同じ感覚で労働者を雇用し生産活動を行っており、企業による社会保険料の負担が給与の31.4%と重い半面、労働者には賃金のみを支払い、仕事がなくなれば容易に解雇できるようになっていると湯元健治と佐藤吉宗は指摘している (湯元・佐藤 2010: 104)。
- 13) 鶴田廣巳も指摘するように、特に有力な資源や産業を持たない国、地域は積極的にグローバル資本への税制上の優遇措置をとるべく、オフショア・センターを設置したり、タックス・ヘイブンとして立地しようとする傾向がある (鶴田 2001: 87)。
- 14) 経済的グローバリゼーションの進展によって、租税競争が激化し、「底辺への競争」が生じるかどうかについては様々な立場が存在する。それらの議論を整理したものとして下平 (2009) があり、下平はグローバル化懐疑説、底辺への競争説、経路依存的調整説、頂点への競争説の四つに分類し、整理を行っている。
- 15) 杉浦によれば、モジュラー化とは複雑な生産システムを半自律的な複数の生産工程に分割することを意味する (杉浦 2014: 32)。
- 16) 武川はこの圧力を「グローバリズムの社会政策」へ向けての再編圧力と呼んでいる (武川 2007: 82)。
- 17) 2014年に日本でも大きな注目を集めたトマ・ピケティのグローバルな累進課税といったアイデアもこうした潮流の一つとして捉えることができると言える。ピケティは、グローバル化した世襲資本主義を規制するには、国家の税制のみを見直すだけでは不十分であり、世界的な資本に対する累進課税を検討する必要があるとしている (Piketty 2013=2014: 539)。
- 18) 1990年代以降盛んになっているコスモポリタニズムに関する議論では、むしろヨーロッパ中心主義を乗り越えることをその一つの目的とすることも少なくない。デランティも指摘するように近年の研究では非西洋社会とコスモポリタニズムの関連が強調されることは多いが、いまだ発展途上の段階であり、今後より一層発展が望まれる分野であると言える (Delanty 2009: 4)。

参考文献

- Bauman, Zygmunt. 1998, *Globalization*, Cambridge, Polity Press. (=2010, 澤田眞治・中井愛子訳『グローバリゼーション：人間への影響』法政大学出版局.)
- Bauman, Zygmunt. and Citlali Rovirosa-Madrado, 2010, *Living on borrowed time*, Polity Press. (=2012, 高橋良輔, 高澤洋志, 山田陽訳『『非常事態』を生きる——金融危機後の社会学』作品社.)
- Beck, Ulrich. 2002, *Macht und Gegenmacht im Globalen Zeitalter*, Suhrkamp. (=2008, 島村賢一訳『ナショナリズムの超克——グローバル時代の世界政治経済学』NTT出版社.)
- , 2004, *Der kosmopolitische Blick oder: Krieg ist Frieden*, Suhrkamp. (=2006, Ciaran Cronin, trans, *The Cosmopolitan Vision*, Polity Press.)
- Chavagneux, Christian and Palan Ronen, 2006, *Les Paradis Fiscaux*. Editions la Découverte. (=2007, 杉村昌昭訳『タックスヘイブン——グローバル経済を動かす闇のシステム』作品社.)
- Chernilo, Daniel, 2007, *A Social Theory of the Nation-State: The Political Forms of Modernity beyond Methodologi-*

- cal Nationalism*, Routledge.
- Delanty, Gerard, 2009, *The Cosmopolitan Imagination: The Renewal of Critical Social Theory*, New York: Cambridge University Press.
- Dicken, Peter, 1998, *Global Shift: Transforming the World Economy*, Sage Publications. (=2001, 今尾雅博・鹿嶋洋・富樫幸一訳『グローバル・シフト——変容する世界経済地図』古今書院.)
- Fraser, Nancy, 2008, *Scale of Justice: Reimagining Political Space in a Globalizing World*, Polity Press. (=2013, 向山恭一訳『正義の秤——グローバル化する世界で政治空間を再想像すること』法政大学出版局.)
- Freidman, Thomas L., 1999, *The Lexus and the Olive Tree*, Farrar, Straus and Giroux. (=2000, 東江一紀・服部清美訳『レクサスとオリーブの木——グローバリゼーションの正体』草思社.)
- Freeland, Chrystia, 2012, *Plutocrats: the New Global Super-Rich and the Fall of Everyone Else*, Penguin. (=2013, 中島由華訳, 『グローバル・スーパーリッチ——超格差の時代』早川書房.)
- Giddens, Anthony, 1999, *Runaway World*, Profile Books. (=2005, 佐和隆光訳『暴走する世界——グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社.)
- Held, David ed., 2000, *A Globalizing World?*, Routledge. (=2002, 高嶋正晴・山下高行・篠田武司・國廣敏文・柳原克行訳『グローバル化とは何か——文化・経済・政治』法律文化社.)
- , 2010, *Cosmopolitanism: ideals and Realities*, Polity Press.
- Held, David Anthony McGrew, David Goldblatt and Jonathan Perraton, 1999, *Global Transformations: Politics, Economics and Culture*, Polity Press. (=2006, 古城利明・臼井久和・滝田賢治・星野智訳『グローバル・トランスフォーメーションズ』中央大学出版部.)
- Holton, Robert, 2009, *Cosmopolitanism: New Thinking and New Directions*, Palgrave Macmillan.
- Hirsch, Joachim, 1995, *Der nationale Wettbewerbsstaat*, ID-Archiv. (=1998, 木原滋哉・中村健吾訳『国民的競争国家: グローバル時代の国家とオルタナティブ』ミネルヴァ書房.)
- 橋本努, 2012, 『ロスト近代——資本主義の新たな駆動因』弘文堂.
- Kendall, Gavin, Ian Woodward and Zlatko Skrbis, 2009, *The Sociology of Cosmopolitanism: Globalization, Identity, Culture and Government*, Palgrave Macmillan.
- Martell, Luke, 2010, *The Sociology of Globalization*, Polity Press.
- 松田有香, 2010, 「国際課税における租税競争と協調」植田和弘・新岡智編『国際財政論』有斐閣ブックス, 111-128.
- 三重野卓編, 2001, 『福祉国家の社会学——21世紀における可能性を探る』東信堂.
- 中谷義和, 2009, 「グローバル化の現代——ひとつの視座」中島茂樹・中谷義和編, 2009, 『グローバル化と国家の変容——グローバル化の現状—現状と課題 第一巻』御茶の水書房.
- 大島孝介, 2011, 『租税競争と差別課税』大学教育出版.
- Ong, Aihwa, 2006, *Neoliberalism as Exception*, Duke University Press. (=2013, 加藤敦典・新ヶ江章友・高原幸子訳『《アジア》, 例外としての新自由主義——経済成長は, いかに統治と人々に突然変異をもたらすのか?』作品社.)
- Piketty, Thomas, 2014, *Capital au XXI^e Siècle*. Édition du Seuil. (=2014, 山形浩生・守岡桜・森本正史訳『21世紀の資本』みすず書房.)
- Rodrik, Dani, 2000, "Governance of Economic Globalization," Nye, Joseph S. and Donahue, John D. eds., *Governance in a globalizing world*. Brookings Institution. (=2004, 嶋本恵美訳「経済のグローバル化の管理」『グローバル化で世界はどう変わるか』英治出版, 393-415.)
- , 2002 "Feasible Globalization," *NBER Working Paper*. 9129.
- , 2011 *The Globalization Paradox: Why Global Markets, States, and Democracy Can't Coexist*, Oxford University Press (=2014, 柴山桂太・大川良文訳『グローバリゼーション・パラドクス——世界経済の未来を決める三つの道』白水社.)
- Ruggie, John Gerard, 1982, "International Regimes, Transactions and Change: Embedded Liberalism in the Postwar Economic Order," *International Organization*, 36(2): 379-415.
- Sassen, Saskia, 1996, *Losing Control?: Sovereignty in an Age of Globalization*, Columbia University Press. (=1999, 伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代——国家主権のゆくえ』平凡社選書.)

- 下平好博・三重野卓編『グローバル化のなかの福祉社会』ミネルヴァ書房。
- 新川敏光, 2003, 「グローバル化の中の福祉国家」『季刊家計経済研究』59: 12-20.
- Skrbiš, Zlatko, and Ian Woodward, 2013, *Cosmopolitanism: Uses of the Idea*, SAGE.
- 杉浦章介, 2014, 『越境的な規範の形成と執行』慶應義塾大学出版会。
- 鈴木弥香子, 2014, 「コスモポリタニズムの検討——グローバル化時代の新たなオルタナティブとしてのアクチュアリティと困難性」『現代社会学理論研究』8: 55-67.
- 武川正吾, 2002, 「グローバル化と福祉国家——コスモポリタニズムの社会政策のために」小倉充夫・梶田孝道編『国際社会5——グローバル化と社会変動』東京大学出版会, 121-150
- , 2007, 『連帯と承認——グローバル化と個人化のなかの福祉国家』東京大学出版社。
- 武川正吾・宮本太郎編, 2012, 『グローバリゼーションと福祉国家』明石書店。
- 鶴田廣巳, 2001, 「有害な租税競争と国際租税協調」『会計検査研究』23: 85-99.
- 渡辺治, 2007, 「日本の新自由主義——ハーヴェイ『新自由主義』に寄せて」デイヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義——その歴史的展開と現在』作品社, 289-330.
- 若森章孝, 2013, 『新自由主義・国家・フレキシキュリティの最前線——グローバル化時代の政治経済学』晃洋書房。
- Went, Robert, 2004, "Economic Globalization Plus Cosmopolitanism?," *Review of International Political Economy*, 11(2): 337-355.
- 湯元健治・佐藤吉宗 2010 『スウェーデン・パラドックス: 高福祉, 高競争力経済の真実』日本経済新聞社。